

透明人間を見たかったんだ

六月一八日（金）朝。同室のイギリス人のカップルにさよならの挨拶をして、部屋を出た。彼らは今日、昆明に向けて出発するので、今夜はもうここにはいないのだ。まさに袖を触れあっただけの出会いだったけれども、まだ寝ぼけ眼の彼らを残して部屋を出るとき、風のような寂しさが僕を掠めた。

階段を下りて、カウンターで今夜の宿泊代を支払っていると、ロビーを縄張りになっている闇両替の男が声をかけてきた。あいにく手持ちのFECが少なくなってきたので、そのことを告げると男は地図を広げて中国銀行の場所を教えてくれた。他の都市では大きなホテルでもトラベラーズチェックをFECに両替できるけれども、西安では中国銀行でないと両替できない、と言う。中国銀行の場所を教えてくれたお礼に、夕方に男と闇両替することを約束した。

男の教えてくれた中国銀行は、勝利飯店から北へ、和平路、解放路とたどったところ、解放路と東西に走る東五路との交差点の少し北にあった。バスを下りてしばらく歩きながら捜すと、すぐに目的のビルは見つかった。時間は午前十時前。すんなりと二万円のトラベラーズチェックを両替することができた。

朝一番のひと仕事を終えて、さて腹も減ってきたことだし朝食にしようと考えながら、適当な食堂を捜した。歩いていると、すぐにうまい具合に、解放路から西へ、革命公園の方へと抜ける道が小食堂街のようなたたずまいを見せているのを発見した。食事には中途半端な時間だったからか、食堂街は閑散としていて、まだ準備中といった様子だったけれども、もちろん閉店しているわけではない。適当な食堂に入って、焼きそばを食べた。

食事をしながら市街地図を広げて、本日の予定を検討。まずは和平門まで戻って、南門付近にある省博物館へ。それから城壁の東にある興慶公園へ行くこと。興慶公園には阿倍仲麻呂の記念碑があるので、それを眺めながらゆっくりとしよう。それから西安の中心に戻って、鐘楼近くにあるイスラム寺院の清真寺のあたりを歩いてみよう。そして、夕方には敦煌と一緒にになったヒゲとスカシの二人から教えてもらった『透明人間』を見るのだ！

路線バスで和平門まで戻り、城壁の内側の道を城壁に沿って歩いていった。大通りにはバスや車がひしめいているのだけれども、一步裏通りに足を踏み込むと、まるでエアークケットにでも迷い込んだように静か

な風景のたたずまいだ。和平門から南門近くまで歩いていくが、しかし博物館らしき建物は見当らない。城壁脇の道からひっそりとした街中の道へと入り、ぐるりとそれらしき街中をひとまわり。しかしどこにも博物館らしき建物はない。地図の見方が悪いのか、それともまさか博物館が取り壊されたというわけでもないだろうが……、と疑いながらそれでも捜しまわっていると、ようやく博物館の裏手にあたる石畳の道へと出た。そのあたりはいかにも古都というたたずまいを見せる街並で、書や扱本などの店、あるいは土産物屋が並んでいた。

陝西省博物館（碑林）は入場三元、手荷物預けに一元。入場門を入っていくと、庭園のようになった敷地内にはいくつかの建物があるのだけれども、メインは碑林。漢代から隋、唐、宋代に至る歴代の名筆を刻んだ石碑が文字通り、林立している。これらは公文書保存の目的で、八三七―一〇九〇年にかけて集められた、いわば当時の図書館だということだ。その数は一〇九五基。図書館にしては超重量級の質量感と、また単なる情報には還元できない美術品的な価値を発散する石の林だ。

六室に分かれた石碑の林を歩きながら、僕はふと雲南の石林のことを思い出していた。石林の方は億年単位の自然の営みが、いわば人間の想像力を突き破るようにして出現したもので、そこには無限とも言いうる自然の多様性、多産性が、石林を形作るそれぞれの石柱の姿かたち、表情として現れているのだけれども、碑林の方にもまた人間的な営みの多様性、多産性が、深い驚きをもつて感じられる。

石碑とはいっても、一柱の碑には小さい漢字でびっしりと文が刻まれたものもあり、また比較的大きな漢字で比較的少ない文字数で刻まれたものもある。またその字体も時代や人により様々だ。とは言っても、そのうちのどれひとつとして、僕にはそこに刻まれた漢字をたどり、その意味内容へと入っていくことができない。ちんぷんかんぷんなのだ。まるで歴史という人間的な暖かみによって魅惑されつつも、その意外な硬質性によって立ち入ることをはばまれているとでもいった感じがした。とはいえ、薄暗い室内に文字通り林立する碑はそれぞれが漢字的な形態によって生きている魂のようにも感じられ、まるで五百羅漢のかたわらを歩いているようなやすらぎにも似た気分を味わったのだった。

碑林の出口あたりにはお土産物コーナーがあり、書や扱本を売っているのだけれども、目玉が飛び出るような高さだったので、素通りした。

省博物館を出て、いったんバスで和平門へと戻り、そこからさらに東の方へと走る路線バスを待ったのだけれども、いつまで待ってもバスは来ない。仕方なく興慶公園の方に向けて歩きだした。碑林めぐりでかなり疲

れたし、おまけに蘭州で買った靴の下敷きがフィットしていないようで、足の小指に水ぶくれができていたので、歩き続けるのが少々つらい。足に気を使いながら、つとめてゆつくりと歩き、途中の露店でジュースを買って休憩しながら 興慶公園を目指した。途中、どこかで派手な爆竹の音が鳴り響き、びつくりして足を止めた。たぶんどこかで店の開店かなにかを祝っていたのだろう。

ようやくたどり着いた興慶公園は平日の昼間ということもあって人影も少なく、ひっそりとしていた。この公園は唐の長安城の興慶宮あとにつくられた公園で、真中に大きな池（興慶湖）があり、池の中の島には沈香亭と名付けられた亭がある。池沿いの小道や島へと渡る橋が気持ちの良い散歩道になっている。南大門から入場し、木立の間を縫うようにして小道をたどっていくと、すぐに阿倍仲麻呂記念碑は見つかった。

阿倍仲麻呂記念碑は、奈良と西安が友好都市になったのを記念して、一九七九年に建てられた。そびえたつほどいかついものではなく公園の一角にすっと立っていた。石碑には正面に『阿倍仲麻呂記念碑』と刻まれ、碑の西側には彼と親睦の厚かった李白の詩、そして東側には仲麻呂の望郷詩が刻まれている。奈良時代に二十才で遣唐使たちと入唐し、その後科挙の試験を経て、役人に任命され、一度は帰国を許され鑑真らとともに出航したが船は難破、結局七三才で没するまで長安の都に過ごした仲麻呂の望郷詩。

あまのはら
ふりさけみれば
かすがなる
みかさのやまに
いでしつきかも

あの時代、奈良と長安の都との間には、今では想像もできないほどの距離があっただろう。そのとほうもない距離感や、あるいは現在と奈良時代の距離、それを越えて阿倍仲麻呂の望郷を感じることは難しいけれども、日本や日本での生活を離れてすでに一か月半、その望郷に似たものの片割れくらいは僕にも感じられるような気がしたのだった。

しばらく休憩したあと、池沿いの散歩道をゆつくりとたどっていった。人影はほとんどなく、茶店なども休業の様子だった。しばらく歩いては、散歩道沿いのベンチで煙草を一服し、再び歩く。人気のほとんどない公園は少し寂しいという気がしたけれども、だからどうということもなかった。漠然と決めた今日の予定はあったけれども、それにせかされることも

ない。少しの寂しさを感じながら、ただ淡々と僕は歩いていった。

北門から興慶公園を出て、静かなたたずまいを見せる街の小道を抜けると、城壁の東門から東に伸びる大通りに出た。そこからはバスに乗って西へ一直線、西安の中心鐘楼まで戻ることができる。

バスが東門を過ぎるとにわかに乗客は多くなり、都会のあわたたしさがバスの窓越しにも感じられる。そのあわたたしさが心地良いようなわくわくするような、うんざりするような。ともかく満員のバスを鐘楼のバス停で降りて、鐘楼から西北の方向に位置する清真寺の方へと歩きだした。とは言っても西安の道はほぼ碁盤の目のようになっているので、北大街の大通りをしばらく北へ歩き、それから路地を西の方へと入っていくことになる。

商店街のようになった路地をしばらく歩いていくと、急にイスラム色が強くなる。イスラムの白い帽子を被った男たちが目立ち、また清真食堂やイスラムの人々に独特の軽食やおやつ類の店や屋台。羊の肉。中国の他の街にはない独特の匂いがあったりには漂い、僕はふとイスラム圏の国を歩いているような気がする。そしてかつての長安というのはシルクロードの終点、起点として文字通り東と西の文化が接する国際都市だったのだということを実感していた。

しばらく街中を行ったり来たりして、ようやく清真寺を見つけた。僕は、巨大なたまねぎのようなイスラム教の大寺院を想像していたのだけれども、それは意外とこじんまりした普通のお寺のようだった。庭からちよつと覗き見ると、お寺には誰もいなくて、入ってもいいのか悪いのか分からなかったし、ずいぶん歩いて疲れていたのので、中を覗いただけで満足することにした。

清真寺から歩いてすぐ、鐘楼のすぐ北西に、鼓楼がある。いったん大通りに出て、鼓楼へと通じる道を入っていくと、道路は掘りかえされ、車も通れないようなありさまだった。道路工事のため鼓楼も閉ざされ、道沿いに並ぶお土産物屋も開店休業状態だった。あたりの様子も鼓楼のたたずまいも心なしか道路工事で砂埃を被ったかのような印象だった。仕方がないので、露店のお茶屋さんに腰を下ろして休憩した。お茶屋さんのテーブルには、ガラスコップにお茶を入れて並べてある。埃が入らないようにということだろうか、コップにはそれぞれ四角いガラスの板を乗せてふたしてある。一杯二角。お茶を飲み、煙草を吸いながら、くすんだような鼓楼の姿をぼんやりと眺めた。

鐘楼のロータリーからいったん南門まで出て、そこでバスを乗り換え、和平門の勝利飯店へ。すでにイギリス人のカップルはチェックアウトし

たあとで、部屋にはひとりきり。気を使う必要はないけれども、少し寂しいという気がした。インスタントコーヒーを入れ、ベッドにもたれて休憩した。

午後六時過ぎ。ホテルのロビーへ出てみると、ちょうど朝の闇両替の男がいあわせたので、二〇〇元(FEC)を三三〇元(人民幣)と交換した。同室のイギリス人の言っていた交換レートよりも少し安いけれども、銀行の場所も教えてもらったし、よしとすることにした。

バスとトロリーバスを乗り継いで、再び鐘楼へ。ちょうど仕事帰りの人々や夕刻に街を行き来する人々で繁華街は賑わっていた。

敦煌でヒゲとスカシが教えてくれた『透明人間』は郵電大楼(郵便、電話局)の前広場で行われているはずだ。郵電大楼は鐘楼のあるロータリーの東北角にある。

人波に流されるようにしてバスを降り、郵電大楼の方へと歩いていく。郵電大楼の大きなビルはすでに閉ざされて、その前広場あたりは繁華街の途切れ目といった感じで、ひっそりとしていた。『透明人間』とはいっても、中国式のストリップ、要するにストリップ小屋を捜せばいいのだ、と軽く考えていたのだけでも、その前広場はときおり人が通り抜けていくだけで、ストリップ小屋らしきものも、それを匂わせるようなものも何もない。

ひよっとして前広場というのは僕の思い違いで、郵電大楼の近くということだったのかもしれない、と考えなおし、郵電大楼のある敷地を囲うようにして路地を捜した。路地は繁華街の裏路地という感じで、食堂や屋台、あるいは映画館など、いろいろな店が、そろそろ夕暮れ始めたあたりにそれぞれの明かりを放っていた。ちよつと派手なネオンや映画館のある娯楽ビルなどはいかにもそれらしい森囲気を放ち、僕はその度に胸をときめかせるのだけれども、そのどれもがハズレ。二度ほど郵電大楼のまわりを捜し、それでも見つけることができなくて、ひよっとして郵電大楼ではなかったのか、と僕は考え始める。それを思い違えているのだったら、捜しようがない、と。

ほとんどあきらめの気分で、再び郵電大楼の前広場をとぼとぼと歩いていると、ふと新聞売りのスタンドのようなものが目についた。よく見るとそこは地下道への入口のようになっていて、そしてさらによく見ると『透明人間』といううたい文句のいかにもいがわしいポスターも張り出されているではないか! どうして今まで気がつかなかったのか不思議だったけれども、たぶんとてもちんまりとした入口と切符の売り台だったので、日本のストリップ劇場を想像していた僕の視界からはこぼれ

ていたのだろう。

いそいそと、切符売りの男からチケット（一・五元）を買い、地下道の階段を降りていく。地下道は幅が二メートルほどで、人通りはほとんどなく、ひんやりとした空気が流れていた。僕はふと、核戦争に備えて掘り進んだ防空壕のなごりではないかという気がしたのだった。しばらく地下道を歩いていくと、その突き当たりの折れ目のところにカーテンが引かれ、その向こうでロック調の音楽が鳴り響いていた。

カーテンの所にいた男にチケットを渡し、中に入っていくと中は真っ暗で、舞台の方を見ると、下着姿の女性がチカチカと点滅するスポットに照らされて、ゆらゆらと踊っていた。暗闇の中に舞台の方を食い入るように見つめる男たちの動物のような臭いが立ちこめているような気がした。と、思うまもなく、点滅するスポットライトに照らされていた下着姿の女性がいつものまにか骸骨の姿になっていて、舞台はそれで終わり。すぐに明かりが灯され、満足したような、肩透かしをくらったような軽いため息をつきながら、観客たちはぞろぞろと出ていった。

明かりの中で見ると、幅二メートル、奥行き四メートルほどの洞窟のような空間が劇場だった。観客席は長椅子が数脚だけ。舞台とはいっても何もなくて黒いカーテンがぶら下がっているだけだ。長椅子に一人腰を下ろして、煙草を吸いながら、次の上演を待った。果たして次の上演があるのかどうかも明らかではないし、客は僕一人きりだったので不安だったけれども、しばらくすると二人連れの客が来た。彼らはたまたま休憩に観客席の方へ出てきた踊り子さんになにやら話かけていた。年はいくつ？とかいうようなことを。

やがて、さらに何人かの観客が揃ったところで、客席の明かりは落とされた。音楽が鳴り始め、舞台ではゆらゆらと踊り子は身体をくねらせる。スポットライトが踊り子を照らし出し、しばらくするとスポットは点滅を始め、一瞬スポットが途切れ次の瞬間には違う踊り子が同じ場所でゆらゆらと身体をくねらせている。踊り子が入れ替わっているというわけではなく、たぶんマジックミラーかなにかの原理を使っているのだろう。そのようにしていく度か踊り子は代わり、その度に次第に衣裳は少なくなっていく。やがて、踊り子の衣裳は下着だけになり、ごくり生つばを飲みながら期待していると、なんと！最後は骸骨が踊っているのだ。肝心かなめの所をはぐらかされた観客を笑うように、点滅するスポットライトに骸骨が映し出されたところで上演は終わり。客席の明かりが灯された。

なんともはがゆいような、だまされたような、スケベ心を見透かされたような、釈然としない気持ちで地下道をあとにした。まあ社会主義中国のストリップだから、あんなものかな、と納得はしていたのだけれども。

暮れ落ちた和平路をホテルの方へ歩いてみると、鍋ものの食堂があった。歩道いっぱいテーブルを出して、客を呼んでいる。鍋は一人前の大きさのもので、僕はうれしくなってテーブルに腰を下ろした。一人の旅行なので鍋物を食べる機会はないだろうと思っていたのだ。今しも火から下ろされたばかりというようなあつあつの鍋と米飯とで八元。野菜も肉も豊富な鍋はおいしくて、おなかも一杯。

帰りに金絲猴（煙草）と冷えた（！）ビールを買い込んで、ホテルの部屋へと戻る。

シャワーを浴び、下着の洗濯もすませて、テレビを見ながらビールを傾ける。今夜は四人部屋に一人きり。ホテルの部屋でこのように一人ゆつくりとくつろぐのはずいぶん久しぶりのような気がする。

*

次の日は、朝九時に勝利飯店をチェックアウト、重たい荷物を抱えて満員バスに乗り、火車站に向かった。大同行き列車は午後三時過ぎの発なので、荷物を駅の一時間前に預けて、それまで西安の街をぶらつこうと思っただ。

荷物を預けたあと、駅前からバスに乗って、八路軍辦事処紀念館へと向かった。革命公園 脇の北新街というバス停でバスを降り、人気の少ない通りを見当をつけて歩いていった。ときおり小雨がちらつくあいにくの天気で、傘を持ってこなかったことを少し後悔したけれども、むしろちょうど良いお湿り程度。

紀念館は国民革命軍第八路軍の事務所として使われた所であり、周恩来や朱徳の使用した部屋が当時のままに再現されている。また延安への長征や抗日戦争、南京事件などの資料や写真が展示されている。参観者は決して多いというわけではないけれども、ちょうど高校生か大学生くらいの年齢好に見える若者たちのグループと一緒に、日本人としての僕は少し緊張する。

考えてみれば僕は何ひとつ知ってはいないのだ。もちろんこれらの人物や事件に関して、その名前や漠然とした事実はもちろん知っている。しかし極端に言うと、僕は歴史というものの外側について、歴史というのはまるで僕とは関わりなくすでに完結してしまっているかのような感触なのだ。それでも歴史に関わろうとすると、僕は歴史的事実を知識として知ることから始めなければならぬ。しかし知識はついに歴史には届ききれないのではないのだろうか。中国人の若者たちのグループを見

て、僕はふと思う。彼らと僕とは同じ歴史的な事実を見ながら、実は反対側（どちらが裏で、どちらが表、ということではないけれども）から見ているのではないかと。そしてたぶんその歴史的事実というものを現在というものの基礎としてつかみ取れているのは、おそらく彼らの方なのだ。一九四五年。僕らは歴史というものを切斷し、彼らの歴史を彼らの方へとお返ししたのだ。ついでに彼らの歴史を彼らの歴史たらしめた僕らの歴史というものもまたそこで切斷し、棺桶にふたをした。僕らは一新されたかのようにだけでも、その実あいかわらずだったのかもしれない。歴史はそれを自らのものとして据えるものだけに光をもたらず。僕らに残されたのは、ただ歴史としての事実だけだ。

それは僕の歴史ではない、と記念館の資料をたどりながら僕は何度も考えていた。そのとき僕の中にあつたのは、拒絶ではなく、羨望でもなく、またあきらめでも、希望でもなく、ただ自分がそうなのだという、歴史的事実と僕との間に横たわる一線の感覚だった。その一線を越えるものは、主体性でも決意でもないだろう。かと言って、僕にそれ以外の答えがあるわけではない。僕にはその一線というものが越えなければならぬものなのかどうかさえ分かつてはいないのだ。歴史的事実と僕との一線、中国人たちと僕との一線、その一線を笑い飛ばすことも、無視することも、忘却することも僕にはそぐわないような気がする。その一線、またいでしまえばそれですべてが忘れられてしまうようにも思われるその一線にひっかかり、そこで立ち止まり、そこで途方に暮れ、そこにうずくまり、またそこを注意深く見つめるということ、とりあえず僕にはそのような考えしか思い浮かばない。

八路軍辦事処は人民解放軍の管轄になつていたのであるか。事務所には人民解放軍の兵隊たちが詰めていて、その前を通るとき、僕は心の中のどこかがいっそう緊張するのを感じたのだった。

八路軍辦事処記念館を出て北新街まで戻り、再び路線バスに乗った。大通りを西へ、西の城壁を通り抜けて、そのままつすぐに西郊外の方へと向かった。城壁から出ると、バス通りとその並木だけが立派な、閑散とした郊外の情景だ。豊登路というバス停でバスを降り、地図をたよりにてくてくと歩いた。地図に開遠門遺址（絲綢之路（シルクロード）起点）というものが記されていたので、そこへ行ってみようと思ったのだ。

やけにだだっ広くて埃っぽいという印象の大通りを不安にかられつつも歩いていくと、やがて両側を道路にはさまれた分離帯のような小さな公園があつた。公園の中には砂漠の隊商のような彫刻があつた。それが再現された開遠門なのだろうか。新しく記念のために造られたような門を、今しもあとにしようとしているところだ。遺址とはいっても他にはなに

もない。別に公園に入っても仕方がないようだったけれども、歩き疲れたので休憩がてらに入園した。芝生に腰を下ろし、お茶を飲みながら、これからシルクロードの隊商がたどっていく前途のことを思った。もちろん僕が体験したのは西域への入口に過ぎない敦煌から蘭州を経て西安までの道程だけだし、それもバスと列車に乗ってのことなのだけれども、その距離にしても、風土のへだたりにしても、とほうもない旅に出かけているうとしているのだと思われたのだった。

開遠門遺址から南へ、団結北路をたどる。西安市街地へと戻るのに、鐘楼へ一直線で戻れるバス路線に出ようと思ったのだ。

都心部から離れて、人通りのほとんどない道を歩いていると、自分がどこにいいのか分からなくなる。少しくすんだような色合いの街。やけに大きな倉庫風の建物。空き地。そして樹木。ぼつりとしたたたずまいを見せる一軒の雑貨屋。曇天の下に、ときおりたたずむ人影。中心地の賑わいが嘘のような、旅のエアーパーケット。

団結北路を南へと歩いていくと、やがて右手に自由市場のようになっていく公園が見えてきた。白地のビーチパラソルのような日よけの傘がひしめき、野菜や果物の露店がそれこそ無数に集まり、人々で賑わっていた。もつともその賑わいは活気あふれるものというよりも、ちょうどお昼過ぎという時間であって、少々まのびしたけだるさのような感触を放っていたけれども。

公園の市場をゆつくりと通り抜けて、バス通りへ。バス停の場所がよく分からなくて通りをうろろしている間に、目の前を一路バスは走り去ってしまった。少々がっかりしたけれども、おかげで標識が立っているだけのバス停を発見することができた。待ち時間は二〇分程度。

まるでなにかから取り残されたかのように静かなたたずまいを見せる街並は、西門を通り抜けて城内へと入っていくと、急に都会の雑然とした雰囲気にも包まれる。静かさをあとにして賑わいへと入っていくとき、僕の中のスイッチが入れ替わり、無意識のうちに気合を入れている自分を見する。

一路の路線バスの終点は鐘楼。なににつけても西安観光の目印になる場所だ。西安観光の最後に鐘楼へ登ってみようと、僕は思う。

鐘楼は大通りの交差する大きなロータリーの真中にそびえているロータリーには四六時中車がひっきりなしに通り、ロータリーを渡る歩道も信号もない。一見すると、どのようにして鐘楼へ行けばいいのか、と不思議に思うのだけれども、簡単なこと。実は、地下道があるのだ。

鐘楼に通じる地下道は小規模な商店街のようになっている。入場は二元（外国人は十元）だけれども、展望台に登るのにはさらに三元の登楼券

を買わなければならぬ。せつかくだから登ってみることにした。

展望台の中では、古都盛世帝王蛆像展というものが開催されていた。要するに、また蠟人形だ。歴史的に有名な人物や事件の蠟人形と、その説明。アライバイ作りのようにひとまわりして、そそくさと展望台を下りた。

鐘楼からバスに乗って、南門を越えた南郊外にある小雁塔(薦福寺)へ。小雁塔は、大雁塔が玄奘によつて建てられたように、義浄によつてインドから持ち帰った経典を翻訳するために建てられたものだ。こちらの方は大雁塔ほどは有名ではないらしくて、付近にも観光地らしい雰囲気はなくて、とまどいながら歩いていると突然行き当たったという感じだった。敷地内にも人影はほとんどなく、静かだった。小雁塔そのものは唐代のまま修復されずに残っているが、登ることはできない。ぐるっと塔のまわりを歩き、木陰で休憩した。

煙草を吸いながらぼんやりと小雁塔を眺めていると、突然二台の大型観光バスが塔の脇に乗り付け、ドカドカという感じで白人の観光団体が降りてきた。それが気に触ったというわけではないけれども、それを機に火車站へと戻ることにした。

*

敦煌では青々とその穂先をとがらせていた麦畑は、ここ西安郊外ではすでに刈り取られたあとだ。畑が黄色に見えるのは、麦の切り株の色。暮れかけた畑の所々に人と牛、ある場合には馬やるばの姿が見える。農家の中庭で脱穀の作業を手伝う子供たちの姿。僕にとってはほとんど想像でしかない畑仕事の情景。だけれども、見たその瞬間に、自分がいつかずつと昔にそういう情景にいたような気がする、そのような情景だ。

晩飯は車内販売の弁当。苦勞して手に入れた硬臥ベッドで、くつろぎながらむさぼる。

やがて暮れ落ちた窓外にちらほらと赤い炎の上がるのが見える。刈り取ったあとの麦畑を焼いているのだ。遠く近く、まるで漁火のように闇の中に浮かび上がる赤い炎を眺めながら、僕にはそれが、焼き畑の炎が、農夫たちの姿が、開遠門が、シルクロードへと向かう石の隊商が、兵馬俑が、夜の避難民たちの姿が、イギリス人のカップルの寄り添う影が、勝利飯店が、透明人間が、西安が、ほんのいつときも留まることなく通り過ぎてしまふ一切の情景が、すでに触れようとしても手の届かないほど遠くに過ぎ去ってしまったもののように思われたのだ。

漠然と、沈黙のうちに、僕は寂しかった。今というこの瞬間をしつかりとつかみ取ることができないということが。あのとときどうしてあのととき

をもっと大切にすることができなかったのだろうか。もっと言葉を交わし、もっと理解することができたはずではなかったのかと。うかうかと通り過ぎてしまう一切のものに対して、僕は大きな喪失感を感じていた。

列車は暗闇の中を走っていた。乗客はビールをラップ飲みしながら、大きな声でしゃべっていた。僕は感傷し、しかし感傷を打ち消すようにして、次の目的地、大同のことを調べた。硬座座席に比べると天国のように思われるベツドに横になって。一日の疲れが出たのだろうか。規則正しい列車の振動に誘われるようにして、いつしか眠りに落ちていた。